

## 推薦の辞

### 未来の呼吸器内視鏡を想像しよう

「池田はやむをえず気管支ファイバースコープを持って廊下に出ると、半数以上の学者たちが、池田の後ろについて、ぞろぞろと会場から出てしまった。」

これは国立がんセンターの黎明期を書いた柳田邦男著『ガン回廊の朝』の一節です。1966年に池田茂人先生がコペンハーゲンで開かれた世界胸部疾患会議の講演の終了後、実物をポケットから取り出して供覧すると、聴衆がドッと演壇に殺到したために、座長の指示で外に出た部分の描写で、呼吸器医がいかにこのような装置の誕生を切望していたのかがよくわかります。

池田先生は1964年に当時開発の進んできた光学技術を応用して、2社と共同研究を開始し、完成したのが世界で最初の気管支ファイバースコープです。その後先生は『Atlas of Flexible Bronchofiberscope』を1974年に英文で上梓され、スペイン語にも翻訳されバイブルのように全世界に広まりました。

その後も気管支鏡はその時々最先端科学技術を取り入れて進歩を続け、気管支内腔だけではなく、壁外の病変へのアプローチや胸腔鏡としての利用など、文字通り呼吸器全体の診断・治療が可能な内視鏡として進化してきました。また呼吸器内視鏡を行うには関係する医師だけではなく、診療放射線技師や看護師の役割も極めて重要になってきております。

ここに、国立がん研究センターの関係スタッフの総力を挙げての呼吸器内視鏡のテキストが、40年ぶりに満を持して発刊されることになり、泉下の池田先生も、さぞお喜びのことでしょう。

気管支鏡は気道異物を摘出するための治療器具として開発されましたが、その後は主に診断目的に進歩してきました。しかし最近では再び末梢肺がんの治療機器としての役割にも注目されてきています。

冒頭で紹介した試作1号機は現在でも国立がん研究センター中央病院の玄関ホールに展示されております。ぜひ本書と見比べて、この50年間の進歩の足跡をたどるとともに、今後の進歩のありさまに思いを巡らせていただけると幸いです。

2015年3月吉日

公益財団法人東京都予防医学協会 健康支援センター呼吸器科 部長  
前 国立がんセンター中央病院 内視鏡部 部長  
金子 昌弘